

2008.9.30 / Vol.23

1880年代教育史研究会 ニュースレター

第 23 号

目 次

[連載]

神辺 靖光 「学区の思想 (21)」 …………… 2

[投稿]

谷本 宗生 「明治初め頃の東京の生活ぶり
—桑茶の植え付け・蓮の実採り・兔飼育—」 … 3
鄭 賢珠 「第三高等中学校教頭松井直吉の活動 (1)」 …………… 4

[研究会便り]

◆大会概要

谷本 宗生 「東京大会 (8月1日～2日)の記録・感想」 …… 6

◆個人報告概要

富岡 勝 「一高資料 (2008年3月調査分)について (2)」 …… 7

田中 智子 「中野実氏と1880年代教育史研究会
—研究会の歴史と氏の業績—」 …… 9

※ 1880年代教育史研究会の7年 …………… 9

[お知らせ] …………… 12

[連載]

学区の思想 (21)

神 辺 靖 光

連載以来、話話しを継いで書き続け、20回になった。この辺で一度立ち止まり、これまでの筋道を整理しておこう。

日本の学区制は1872年「学制」の大学区・中学区・小学区から始まるが、その眼目は「邑ニ不学ノ戸ナク家ニ不学ノ人ナカラシメンコトヲ期ス」(学制布告書)という趣旨を貫徹させるための小学区で、全国の学齢児を洩らさず就学させようと山間僻地、津々浦々まで網の目のように細分し、5万3760箇所を区切った。それを束ねるため、210小学区を1中学区とし、さらに全国土を8大学区に区画した。その前提に71年の廃藩置県と戸籍法による全人民の把握があった。

藩はなくなったが、北東から西南に長く湾曲する国土を区切ることは大変である。大学区は府県名で示されているが、その連結は古来の道州制(例えば北陸道若狭国から越前国へ)と中世に概念化された奥羽・関東、中国・九州といった地方を組み合わせたものである。府県統廃合の進行中であつたから、これは有効であつた。本部がすべて港湾を持つ府県であることからみて、はじめに本部の位置を決めてから学区を決めたと思われる。

中学区は人口を基準とするとしながらも古代中世以来の郡によることが多かった。山岳、丘陵、河川等によって仕切られた郡は住民の生活に密着していたからである。79年、中学区がなくなってからも郡または数郡を中学区とみなすものが続出した。郡は学校設置維持の資金能力がないので、次第に地方税による県立中学校が隆盛し、86年から府県が実質的に中学区になった。

小学区は在地の学齢児を就学させることを目的としたからシビアに作られた。戸籍区の小区から積み上げていったが、小区は旧部落や自然村からできており、村の統合が繰返されて行政村が次々にできたので78

年の郡区町村編制以後、町村が小学区の単位になり、88年の市制・町村制によってこれが確立した。

学区には学校の設置維持と学区内児童生徒の就学(通学区)という二つの機能があつた。小学区は、はじめはどのように機能したが、民費の徴集が困難になり、三新法以後は町村協議費に地方税を補助する形となった。通学区は広域の場合は高学年児童は本校、低学年は分校という形をとった。中学区の民費徴集はさらに困難を極め、三新法以後は町村協議費によつたが、これも挫折し、結局、地方税による府県立中学校体制になる。通学区としては数郡連合の時期から問題が噴き出した。学校設置位置から遠い郡は連合から離脱し、県立中学校になってからは寄宿舎の設置と学校医の配置が新たな問題になった。

この二つの機能からみると大学区は無用の長物であつた。東京大学の前身・東京開成学校もそのまた前身の一番中学もすべて官費であつたし、通学区もなかつた。全国から有志青年が上京遊学したものであつた。

しかし大学区には別の機能があつた。それは新しい教育を推進し、学校の模範を示し、これを監督することであつた。これがために大学本部に官立英語学校、官立師範学校が建てられた。各大学区本部に置かれる筈の督学局は結局、文部省内に一つできただけであつたが、そこの官員達ははじめは大学区別に、後には一定の地方を巡回して学事視察、督励を行った。中学区にも教育推進監督の機能があつた。学区取締がそれで中学区内に取締控所が置かれていた。75年から府県の学務課が整備され、中学区の教育監督機能は次第にここに移されてゆく。

以上、1870年代後半から80年代にかけての学区の変遷とその機能の変化をみてきたが、学区の機能には小学→中学→大学への進学機能が内在していた。(以下号)

[投稿]

明治初め頃の東京の生活ぶり —桑茶の植え付け・蓮の実採り・兎飼育—

谷本 宗生

8月初めの東京・高円寺での本研究会において、神辺・田中・谷本の3会員間でいろいろ取り上げた話題は有意義であったが、とくに明治初め頃の東京の生活ぶりについては、筆者（谷本）はとても興味深いと感じた。筆者がその後いくつかの文献を読んで、その話題について学び得たことを以下に、本稿で示したい。

明治初期の東京の武家地については、従来からあった樹木を伐採し桑や茶などを盛んに植え付けたという（奥田晴樹「金沢の士族と授産事業」『近代日本の地方都市 金沢／城下町から近代都市へ』2006年）。薩摩藩士で明治政府に侍従として出仕した高橋軻之助（1844～1916年）の証言には、次のような件がみられる。

「昔はこの向こうが紀州の邸で、ここがオワイ（尾張）の邸、そのむこうが井伊（彦根井伊家）の邸で紀尾井町じゃ。その頃は名木もたくさんあったろうが、維新後みんな截ってしまった。樹木があったては野蛮じゃというての。樹木のないのが文明じゃそうな。ハハハハ、妙な文明もあるものじゃ。上野や増上寺は免れたが、ここらは樹を切って、すっかり桑と茶とを植えつけてしまった。」（佐々木克監修『大久保利通』2006年、184頁）。

山川菊栄『覚書 幕末の水戸藩』（1975年）に所収されている話であるが、作事方として勤めていた旧旗本が、明治政府からの出仕要請を固辞して幼い子とともに上野・不忍池に潜って蓮の実を採って生計をたてていたという。

「不忍の池を見おろしながら休んでいると、〔和田〕陽さんがしみじみした口調でいった。「こうして不忍の池をみるごとに、私には父の子供のころの苦勞が思われるのよ。父が一〇ぐらいのとき、

維新で家がつぶれてね、旗本で一〇〇〇石とか何とかいいましたっけ。どうにも生活の方法が立たないで困っているとき、この池へ大人がはいっては蓮の実をとってそれを売っているのをみて、自分も真似をして蓮の実をとって売ってお金にしたそうよ。それで夜、銭湯へいくとくさい、くさい、といわれて閉口したんですと」その父君は幕府のお作事方とかを勤め、建築の方の係りだったので、新政府の方でしきりに呼び出しにきた。新政府の方でも、江戸城の手入れ、その他新旧さまざまの建築の仕事に、誇り高い江戸職人と呼吸を合せて使いこなすには、何とんでも無骨な田舎侍より、万事心得ているお作事方以来の専門家に出てもらうに越したことはないので、何べんとなく拝み倒しに来たが、遂に応ぜず、年のいかぬ子を不忍池にもぐらせて、蓮の実をとらせても、薩長には使われないという、江戸侍の意地を通したとのこと。」（山川『覚書 幕末の水戸藩』363頁）。

また山川『おんな二代の記』（1972年）にも収録されている1872年頃の兎ブームについては、最終的に東京府が鎮静化のため兎税をかける始末であった。

「かけ声にのった流行の一つが養兎でした。くいつめた士族が家屋敷を抵当にし、家財道具を売って高い種兎を買い、荒れ屋敷の片すみで育てるうちに、ふえたわ、ふえたわ。兎はむちゃくちゃにふえたものの、さて肉や皮の利用は知らず、政府も奨励しっ放しであとは無計画なのですからしまつがつかず、はては餌代にも困り、ただでも貰い手がなくなると、夜になってこそそそ空地やお濠の土手の中ですててゆく者がふえました。小赤壁といわれた美しいお茶の水の溪谷や千世の家の前の

土手にも、青草の繁みの中に白い兔がピョンピョンとびはねている姿が見られ、何をしても失敗つづきで、これを最後のきずなと頼んで軽い財布の底をはたいた貧乏士族はいよいよ頼みの綱もきれた姿となりました。」(山川『おんな二代の記』54頁)。

兔ブームでは珍種と称して1羽数百円の高値をつけることもあり、値動きがはげしくなけなしの財産を一挙に失うものが多く、1873年12月東京府は養兔は破産のもとであるとして、兔1羽につき月1円の税金をかけ、無届飼育は2円の罰金を課した。「蓄ふ人は皆一金にさはぐなり 月に兔の飛んだ税金…」とも世にいわれた。兔に続いて芸妓も月3円課税されたという。当時の『郵便報知』(1873年12月26日)には、「兔と猫の珍妙問答」が掲載されている。

「芸妓に猫の異名あり、兔月を見て踏ね、猫花に依て転ぶ、品はかはれど同じ月花に浮かる獣仲間、兔猫に向て云よう、今度お前方も税を出すとの風

聞、御気の毒のことなり、併しさびれた女郎衆も三円取られて、極く盛んな地獄には税の沙汰もなし、ちと不公平なことと思はれる。猫云ふ、地獄は税所が、決してならぬとのことさ。兔云ふ、地獄は只やめろやめろと計りにては、是迄の兔と同じことにて、やはり流行するのさ。此節我々を土蔵の中や板敷の下へ隠す者あれど、踏込で罰金をとるとのこと、して見れば、なんぼ隠れた商売でも、上の御威光で裏店の隅々まで見通したら、知れぬことは有間敷に、隠し売女に税がなくて隠し兔に罰金あるは、チト聞えませぬニャア猫さん。猫云ふ、御前も此節流行の焼餅にかぶれて彼是云ふが、地獄も今に税の沙汰になるだろう。兔云ふ、ナゼ。猫云ふ、皆様御存じの通り地獄の沙汰も金次第。」

[投稿]

第三高等中学校教頭松井直吉の活動(1)

鄭 賢 珠

第三高等中学校事務規則によれば教頭の役割(『校定法規』(550005) 1-1 事務規則「第三高等中学校事務規則」)は次の通りである。

「第一条 教頭ハ学校長ノ旨ヲ承ケ左ノ事務ヲ管理ス

- 一、教員授業法ノ良否得失ヲ監察スル事
- 一、教科書及参考書ノ選択ニ関スル事
- 一、各教室秩序ノ整否ヲ監視スル事
- 一、教員ノ学科受持ニ関スル事
- 一、教室ノ位置広狭便否等ヲ考査スル事
- 一、入学試験ノ科目ニ関スル事
- 一、生徒ノ試験及昇級降級ニ関スル事」

学校長の指示を受けて事務を管理するという前提が付くが、その事務の内容は、学生を入学させる時の試

験科目、入学後の試験や進級、教科書などの選択という教員としての権限だけでなく、「教員の授業法の監察」という校内の管理職的な内容も含まれている。

そもそも教頭という役職は、1886年9月7日に設置されて1891年8月31日に廃止されるが、第三高等中学校でこの職に就いたのは松井直吉一人だった。

農芸化学者として知られている松井は、1857年に岐阜で生まれ、貢進生として1871年大学南校に入学、1875年7月アメリカに留学、1878年7月コロンビア大学鉱山学科を卒業する。帰国後の1880年10月東京大学理学部講師になり、翌年には教授になった。1887年4月に第三高等中学校教頭になり、1888年6月には理学博士、1890年6月には帝国大学農科大学教授になって、その後20年間農科大学長も兼任する。さらに、文

部省実業教育局長や高等学務局長を兼任し、そして専門学務局長(1902.3-1905.2)になって東京帝大農科大学教授を兼任したこと等から、学者、教育者、学校管理職とともに教育行政に関与した面も窺える。

松井は、帝国大学工科大学教授から第三高等中学校に転任してきて教頭という役職の傍ら、1887年には英語を、88~89年には英語、地質、鉱物、化学を受け持っている。当時、学校長は折田彦市だが、文部省参事官を兼任して多忙で京都から離れがちだったため、実質的な校務は教頭である松井に任されていたと思われる。

教頭会議の開設について校長会が提出した上申書の中からも教頭が重要な役割を果たしていた事が窺える。1888年6月5日付けの上申書に「各高等中学校教頭ヲ本年夏期休業中 文部省ニ召集セラレ教授上ノコトニ付 諮詢協議セシメラレ度キ事」とされている。

5月30日高等中学校長らから文部大臣に、

「抑各校ノ大体上ニ関シテハ毎年小官等定期ノ会同アリ又医学部一切ノ事ニ関シテハ既ニ客年医学部長ノ候補者ヲ召集セラレ今年亦医学部長ノ会同アリテ互ニ諮詢協議シ其益スル所尠ナカラス候得共要スルニ甲ノ会同ハ学校ノ大体ニ関シ乙ノ会同ハ医学部ノミニ限ラレタルモノニシテ各本校教授上ノ事即教科課程ノ適否授業方法ノ利弊等ニ関シテハ未タ之ヲ諮詢協議スルノ機会ヲ得ス甚遺憾ノ全ニ存候就キテハ本年夏期休業中ヲ期シ各高等中学校ノ教頭ヲ召集シテ本省中ニ会同セシメラレ以テ教授上ノ事ニ関シ諮詢協議セシメラレ候様致度此段上申候也」

と上申した。

その結果、6月9日に文部省総務局長辻新次が第三高等中学校長折田彦市に

「今般各高等中学校長ヨリ申出之趣モ有之校務上ノ事ニ関シ諮詢協議ノ為メ各高等中学校教頭若クハ首任教諭ヲ招集候ニ付来七月十日着京ノ見込ヲ

以テ貴校教頭(首任教諭)ヲ出京セシメラレ度此段及御通達候也」

このように上申が受け入れられて教頭会議が開かれるようになった。7月に開かれたこの会議には、第一高等中学校教頭 村岡範為馳、第二高等中学校教頭 難波正、第三高等中学校教頭 松井直吉、第四高等中学校教頭 飯森挺造、第五高等中学校教頭 西村貞、山口高等中学校教頭代理校長 河内信明が参加している。

会議内容については、7月25日の「六高等中学校教頭協議上申書」(三高資料)は次のような項目で纏められている。

「○改正学科ニ関スル件(略)

○文部大臣演述学科教授法ノ件(略)

○学科細目ノ件(略)

○競争試業ノ件(略)

○巡視ノ件

各高等中学校経費ノ許ス限ハ教頭或ハ教員ヲシテ一年凡ソ一回宛互ニ巡視セシメ度事

○監督学校ノ件

地方ノ情况ニ依リ高等中学校ノ監督ニ属スル予備ノ私立学校ヲ設クル様奨励致度事

○体格検査ノ件(略)

○入学試業学科々々目ノ件(略)

○学年評点表ノ件(略)」

松井は7月11日上京するが、その前に三高区域内の諸尋常中学校を視察している。例えば、2月7日三重、滋賀、岐阜の三県尋常中学校視察のために出張し、5月21日には和歌山県尋常中学校の視察に出かける。そして、6月2日には高知県尋常中学校を視察する(『第三高等中学校第十九回年報明治廿一年一月起同年十二月止』)。巡視は専ら尋常中学校に限られているように見えるが、会議が開かれる前から盛んに行われていた事がわかる。松井は何を視察し、その結果をどのように反映させたのだろうか。(次号に続く)

[研究会便り]

東京大会（8月1～2日）の記録・感想

谷本 宗生

東京大会の記録・感想を、世話人を務めた谷本が以下に示したい。8月1日（金）13時、東京大学駒場博物館に集合し関係史料の調査を行った（富岡・小宮山・田中・谷本の4名）。当日は東京大学オープン・キャンパス開催中にもかかわらず、駒場博物館側の折茂氏のご理解によって大学予備門、第一高等学校関係史料の継続調査ができた。撮影データは、富岡・小宮山会員らによって近日中に取りまとめられる予定。文責者（谷本）がみた限りでも、大学予備門の英語専修科設置にあたって、各府県の希望者に対して試験問題を府県側に郵送して選抜を行うという「委託試験」方式を実施した史料が予備門側の往復文書簿冊の中に収められており、たいへん興味深いものであった。17時まで同館内で史料調査を実施したが、ちょうど戦時下の一高史料調査に来ていた大東文化大学荒井ゼミナールの学生諸子にも遭遇した。彼女らは8月末の松本・旧制高等学校記念館主催の夏期セミナーにおいてその調査作業報告を行う予定であると聞き、大学の夏休みにもかかわらず直向きに取り組む学部学生諸子の姿に感心した。夕方駒場周辺で懇親会を開始する少しの間、近代農学の発祥地とされるケルネル田んぼなどがある駒場野公園を散策。18時から上原にある創作料理店にて懇親会を開催した（荒井・富岡・小宮山・田中・谷本の5名）。20時半過ぎ、懇親会を終了し、適宜解散した。

翌2日（土）9時半、杉並区高円寺北区民集会所に集合し、第2日めの研究部会を行った（神辺・富岡・小宮山・田中・谷本の5名）。午前の司会は小宮山会員が務めた。口火をきって田中会員から、厳会員の近刊に対する並々ならぬ思いが披瀝され、共同研究と個人研究との峻別、その自覚と研究叙述の在り方について本研究会としてもいかに認識するのかを厳しく問題提起した。続けて「中野実氏と1880年代教育史研究会—

研究会の歴史と氏の業績—」も報告された。本研究会が発足して7年を迎えるが、「会がどのような活動してきたのかを振り返るとともに、会の初心に立ち返りたい。創設者中野実氏の思いを再認識し、会の現状を認識し、今後の方向性を考えるよすがになれば、という狙い」（田中会員の当日配布レジュメより）であった。7年間を3つの時期区分して、本研究会の課題と現状を直視する内容となった。「高等学校」研究が主体でなかった中野会員の射程を批判検討して、改めて各自自らの足元を見つめ直し、本研究会としてなにを明らかにするのかを自覚せよ！と力説した。

それらを踏まえて、参加会員の総意として次のようなことを決議した。年数回刊行しているニュース・レターとは別に、年1回のペースで研究論文や調査報告、史料紹介などを掲載する『1880年代教育史研究会 研究紀要』（仮称）を自前で刊行しようという試みである。会の研究紀要ゆえ全会員執筆が原則で、3月末には各自執筆（仮）題目・内容を事前に発表し、5月末までには執筆原稿（データ）を提出し、8月末には紀要完成というスケジュールを遵守しなければならない。創刊号にあたっては京都在住会員らが編集実務を担当するとし、印刷業者の選定は京都・広島・東京などの各社に見積り打診をはかったうえで決定するものとした。なお上記の決議内容は、神辺・富岡・小宮山・田中・谷本の東京大会・参加会員が相談した結果ゆえ、他の会員に対しては近日中に富岡事務局よりその旨周知連絡する予定である。研究紀要は『東京大学史紀要』同様にB5版サイズで、縦書きの2段組み。本会発足の10周年までは、1つの節目として継続刊行を目指したい。

神辺・小宮山と自身の研究活動報告（近況）を終え、12時半過ぎに神辺顧問の案内に基づき高円寺駅ビルで昼食を楽しくした。14時前から、また北区民集会所

にて午後の研究会を再開した。まず富岡会員から、3月の駒場調査で入手した木下広次関係史料からの興味深い紹介がなされた。1890年の寄宿舎自治制の導入は、木下だけの発案ではなく、生徒らからの意見を取り入れながら実施された可能性が高いと裏付けられる史料であった。続いて谷本会員から、ニュース・レター第22号で掲載した後藤新平の「聯合公立医学校」構想の原史料が全文紹介された。主な質疑事項は次のとおり。安場保和との関係は？後藤26歳で、安場の二女和子と結婚。それ以前、安場が胆沢県（現在の岩手県内）大参事時代に将来を期待して後藤12歳を書生とし、さらに安場が愛知県令時代に後藤19歳を愛知県病院医師に抜擢している。後藤の名古屋滞在期間は？1876年8月、愛知県病院の医師として赴任（後藤19歳）。お雇教師ローレッツらの医療指導を受けている。ドイツ学に傾倒。1883年1月、内務省御用係となる（後藤26歳）。後藤の初めての留学体験は？衛生局時代の1890年4月からドイツに留学している（後藤33歳）。2年後帰国し、内務省衛生局長。後藤の「聯合公立医学校」構想の広がり？1881年1月に愛知県医学校長心得後藤と岐阜県医学校長土屋寛が連名で愛知県令国貞廉平に建白している。後藤の活動は内務省衛生局長であった長與専斎にも評価され、内務省に後藤が抜擢され

る。＊『正伝 後藤新平』より谷本回答。

谷本報告の後、富岡・小宮山の両会員は都合もあって早退したが、残る神辺・田中・谷本の3会員は17時まで研究会を続行した。主たる報告事項はなかったが、昨今の研究動向をめぐって自由談議に花を咲かせた。神辺・谷本らは、五高・三高・一高などの原史料調査は重要でありこれからも継続していく必要はあるが、同時並行的に近代日本に生きた人物らの自伝・伝記類も数多く読破しておくほうが望ましいと主張した。この点は研究上の問題意識の広がりや深まりとの兼ね合いもあり、原史料調査との相関関係といえるかもしれない。森銑三や柴田宵曲らの文献もなかなか興味深い。予定とおり、東京大会終了。次回の本研究会は、三高史料調査も兼ねて久しぶりに京都開催を予定している。東京大会も無事終了し、今は世話人としての重責から解放され安堵した。次回の京都大会は、季節柄景色もよいころであろうか、非常に楽しみである。京都の世話人らにはまたお世話をかけ恐縮する次第である。いざ、京都へ！京都でまた、お会いしましょう。

[個人研究報告]

一高資料（2008年3月調査分）について（2）

富岡 勝

前号での紹介の続きとして、木下広次第一高等学校校長に対する生徒からの意見書を取りあげたい。すでに宮坂広作『旧制高校史の研究 一高自治の成立と展開』（信山社、2001年）などで指摘されているが、1890年の寄宿舎自治制は、木下一人の考案ではなく、生徒からの意見を取り入れながら実施に移されたことが2008年3月調査分の一高資料によって具体的に裏付けられそうな見込みであり、早急に関係資料を精査していきたいと考えている。この作業の一環として、8月東京大会の富岡報告では、以下の二つの史料を紹介

した。

【史料1】 安達峰一郎（仏法科2年生）「業ヲ卒へ第一高等学校ヲ去ルニ際シ聊カ在学中ノ感想ヲ述ベテ校長木下博士ニ呈スル書」（1889年6月頃の執筆か）

【史料2】 田原豊（英予科2級生徒総代）「意見書」（1889年7月2日）

これらのうち、本号のニューズレターでは、安達峰一郎による1の史料を取りあげたい。

この安達→木下校長宛の史料(以下、「在学中ノ感想」

と略)は、「教育論」と題された6月21日付けの安達→一高教員久米幹文宛の文書に添付されていたものである。この久米宛の「教育論」では、「教育論という題の文章を書くよう久米から指示されたが、そのかわりに実用に近い事柄に関する一文を綴ることにした。許していただき、批評をいただきたい」という趣旨が述べられている。その実用的なテーマの一文が木下校長宛の「在学中ノ感想」であった。

なお、宛先が木下「教頭」(1888年8月に辞令)ではなく「校長」となっていることと、文章の中で寄宿舎の自治制導入を要求していること(つまり、1890年2月の寄宿舎自治制導入以前)から、6月21日付け久米宛の文書が書かれた年が1889年であり、その少し前に木下宛文書が執筆されたと判断することができる。

卒業を間近に控えた安達の「在学中ノ感想」は、終りの部分で「以上生ノ陳述シ来レル十三ヶ条ハ皆生ノ信ジテ本校ノ為メニ必要ナリト爲ス所ニテ熱心ニ閣下ノ採用ヲ望ム所ナリ」と述べているように、一高教育の改良に関する13ヶ条の要望書であった。その13ヶ条とは以下のようなものだった。

「第一、国学漢学ノ課業ヲ奨励シ宿題ノ制ヲ廃スル事

第二、本邦歴史ノ教育ヲ完全ニスル事

第三、倫理教育ニハ少クトモ一月ニ一回ヅツ内外ノ諸名士ヲニシテ操行高ク生徒ノ口慕ト尊敬トヲ受クベキモノヲ聘シ道德上ノ談話ヲ囑託スルコト

第四、第一外国語ノ課程ヲ高ムル事

第五、各時間ノ始メニ於テ教師ハ平素授クル所ノ課業ニツキテ反覆、生徒ニ問ヒ試シ以テハ生徒ノ怠課ヲ防キ一ハ生徒ノ学力如何ヲ観ルベキ事(「生ノ知ル所ノ高等中学生ハ其数殆ンド三百人ニ下ラズ而シテ皆多少脳病ノ気味アラザルハ無シ、其病因ノ在ル所ヲ問ヘバ大抵試験ノ突如

トシテ至リ不時ニ脳髓ヲ過勞セシムルニ由ルト云フ」という理由から、生徒の健康に過大なストレスを与えな学習方法を要望)

第六、体操課業ノ後ハ三十分ノ休憩時間ヲ与フル事

第七、試験ノ監督ヲ厳ニシ□□旨義ヲ全廢スル事

第八、教師生徒ノ間ニ情実ヲ行フヲ禁ズル事

第九、兵式教練ハ兩日ニ於テ書籍ニ就キ軍隊編成及ビ兵員運動ノ講義ヲ爲スベキ事

第十、運動会競漕会ノ為ニ妄ニ休業スルヲ廢スベキ事

第十一、寄宿舎制度ハ善ク生徒ノ自治能力發達ノ程度ヲ計リ之レニ適セル自治制度ヲ施行スベキ事(略)高等中学校寄宿舎ハ宜シク純然タル自治ノ制度ヲ採用スベシ

第十二、教育ノ主義ハ男性タルベキ事

第十三、本校ノ卒業生ニハ卒業論文トシテ在学中ニ其ノ感得セル事項ヲ略記シテ校長ニ呈セシムベキ制度ヲ設クル事

これらの13ヶ条のうち、どれが木下の同意を得て実行に移されたかどうかは今後の検討課題であるが、少なくとも第11番目の寄宿舎制度に自治制度を導入すべきだとする要望は、木下によって積極的に受け止められたようである。2の史料では、在學生徒たちは木下から寄宿舎の細則と教授上の事柄に関する意見を求められ、1889年6月26日には各組から委員が選出されて討論が開始され、7月2日には総代の生徒より意見書が出された。その意見書が史料2である。

8月の東京大会での報告内容は、以上のような概略的なものにとどまったので、次号ニューズレターでは史料2を中心に、より具体的に検討していきたい。

[個人研究報告]

中野実氏と1880年代教育史研究会 — 研究会の歴史と氏の業績 —

田中 智子

本研究会創設者中野氏の思いを再認識し、初心に立ち返るべく、2001年9月の発足以来、7年になる当研究会の歴史を振り返った。2005年10月の教育史学会第49回大会でのコロキウム（「1880年代日本教育史の再検討にむけて—高等中学校は何故、どのようにできたのか—」）の開催を決定した2005年2月より前の約3年半、発表に関連する活動を重ねた2005年2月からの約1年間、それ以降すなわち2006年3月からの約2年半の三時期に区分できる。定例の研究会は計18回実施、ニューズレターは計22号発行されている。その内容を年表あるいはバックナンバー一覧として示したが、本紙編集担当者とも相談し、後者の方はいずれ区切りのよい時期にまとめて掲載することとする。

コロキウム開催という目的の影響もあり、昨今の会活動は「高等中学校」問題に集中しているように思われる。しかし、「帝国大学体制」すなわち「帝国大学と帝国大学をめぐる諸制度（中等教育・卒業生の任用と優遇・学位・教職員人事）とが、国家体制と密接な関係を保ちながら調整され、構造化された枠組」に制度史からアプローチせんとした中野氏の射程において、「高等中学校」は一つの重要なテーマではあっても、そのすべてではない。

また中野氏が、森の思想・帝国大学令そのもの（理念）・実際の帝国大学の三者を峻別すべきことを説いていたことを援用すると、「高等中学校」を考えるに

あたっても、森らによる構想・中学校令自体の理念・高等中学校の実態のうち、何を分析しようとしているのかを自覚する必要がある。昨今の議論においては、これらが時に混同されているのではないかと。各自が「高等中学校」を研究目的にしてしまうのではなく、これまでの自分の研究の延長線上に「高等中学校」を素材とすることで何を明らかにしようとしているのか、すなわち「高等中学校」を分析することの必然性や分析視角を見つめなおすことが必要であろう。本研究会は、「高等中学校」研究会ではなく「1880年代教育史」研究会であることに思いをいたすべきである。

中野氏の研究は、帝大その他関連官立校の公文書を発掘し、それらから析出される新事実から議論を組み立てようとする手法に真骨頂がある。氏の視角や分析手法は、改めて評価できる。だがそれとともに、やり残された点や限界についても検討する必要があるだろう。例えば以下の諸点がそれである。①「帝国大学体制」という概念的枠組について。ある意味「進学ルート」の完成とも受け取れる上記の定義であるが、タイムスパンなど不明・不十分な点が多い。②財政縮減や行財政整理という視角について。東大末期の内部改革や諸官庁の専門高等教育機関の再編・統合を分析する際、すべてがこの問題に収斂されることは妥当か。③学校行政文書以外の史料収集方法について。特に新聞・雑誌類の扱いに関しては中途半端な感が否めない。

【1880年代教育史研究会の7年】

*ニューズレターを手がかりにした仮年表。修正・加筆を乞う。

<第一期 2001.9~2005.2>

2001.9.30	上越教育大学で開催された教育史学会第45回大会にて発足
2002.2.	第1回研究会（京都）、京大総合人間学部図書館三高史料見学
2002.3.30	発足人中野実氏逝去
2002.5.1	ニューズレター創刊（荒井編集）

	<p>・会の目的：「1880年代（明治10年代）の教育史を、政策・制度・実態を貫いて捉え、その延長線上に森文政期を捉えようと試みることを目的としています」</p> <p>・中野の仮説：「1880年代の政策・制度展開が、帝国憲法体制に収斂していくのではないかと・森文政はその過渡的位置にあったのではないかと」</p> <p>・中野の計画：「若い研究者が中心なので『まるでひとりごとを言っているような』ニューズレターを頻りに発行して研究交流を活性化させる」、「成果が出てきたら…教育史学会のコロキウムを設けよう」（＜1880年代教育史研究会の発足とニューズレター創刊にあたって＞、＜1880年代教育史研究会代表中野実さんの逝去によせて＞）</p> <p style="text-align: center;">（荒井（文責）・小宮山・田中・谷本・富岡・福井の名で）</p> <p style="text-align: center;">「中野さんが文字通り命燃え尽きるまで尽力して下さった研究会を大切に育てていきたい」（荒井）</p>
2002.6.28	第2回研究会（東京 於：大東会館）、『地方教育史研究』23（2002）特集の再検討
2002.9.1	第2号刊行（以後第10号まで富岡編集） 神辺「学区の思想」連載開始、高等学校や中学校令についての各自考察の掲載軌道に乗る。 ※ この頃、HP開設
2002.12.25	第3号刊行
2003.3.5	第4号刊行 佐藤秀夫氏逝去（2002.12.14）特集 入会希望の意を示していた佐藤氏の語録（荒井） 『――という視点からの研究は無い』と断言する知的傲慢さ 「無批判に先行研究や史料集に依拠しているため、同じ過ちを繰り返すおそまつさ」 「80年代研究会のニューズレターは楽しみです」
2003.3.7・8	第3回研究会（東京大会 荒井・神辺・小宮山・谷本・富岡＋非会員） 宮内庁書陵部見学、土屋忠雄著書検討 ※ 厳入会
2003.3.15	研究会通信の発行（荒井）
2003.6.6	第5号刊行
2003.6.14・15	第4回研究会（広島大会）
2003.10.1	中野『近代日本大学制度の成立』刊行
2003.10.9	第6号刊行 ※ 佐喜本入会
2004.3.12・13	第5回研究会（京都大会 於：三高会館 荒井・神辺・厳・小宮山・佐喜本・谷本・田中） 京大大学文書館見学、京大総合人間学部図書館（最終）三高史料調査 翌年のコロキウムでの報告決定、先行研究や基本史料リストの作成企図
2004.4.10	第7号刊行、研究会彙報定例化
2004.6.18・19	第6回研究会（仙台大会）、東北大史料館二高史料調査 協議事項（谷本まとめ）として「当面の段階では高等学校を研究対象としてとらえるが、あくまで1880年代の教育史像の再検討などを大きな目標としていることに十分注意すること」

2004.8.3	第8号刊行、研究会事務局谷本へ
2004.8.28・29	第7回研究会（東京大会 於：山上会館） 東大博物館・史料室見学、活動計画の相談 ※ 鄭入会
2004.11.10	第9号刊行
2005.2.4	第10号刊行

＜第二期 2005.2～2006.3＞

2005.2.25・26	第8回研究会（京都大会 於：三高会館 荒井・神辺・巖・小宮山・佐喜本・谷本・田中・鄭・富岡） コロキウム準備開始、科研申請を決定、ニューズレター全員執筆の原則確認、会運営の交代制確認、以後しばらく京都での開催が定例化
2005.3.26	第11号刊行（以後第14号まで巖編集） 研究会報告要旨掲載の定例化
2005.6.4・5	第9回研究会（京都大会 於：三高会館 荒井・神辺・巖・小宮山・佐喜本・谷本・田中・鄭・富岡） コロキウム準備
2005.7.7	第12号刊行
2005.8.22・23	第10回研究会（京都大会 於：三高会館 荒井・神辺・巖・小宮山・谷本・田中・鄭） コロキウム模擬報告、科学研究費申請案検討
2005.9.20	第13号刊行（現在のところ、Web化はここまで）
2005.10.9	教育史学会第49回大会コロキウムで発表 「1880年代日本教育史の再検討にむけて—高等中学校は何故、どのようにできたのか」 司会荒井、企画者：富岡 報告1：谷本 予備門をめぐる動き、府県聯合設立高等学校計画案 報告2：田中 設置経費問題、運営経費問題（第三・第四区）
2005.10	科研費への応募（小宮山代表） 「国家体制構築期における教育制度再編過程の解明：1880年代の地方と中央の相互作用」
2006.1.15	第14号刊行 1880年代教育史研究会の成果と課題（小宮山）

＜第三期 2006.3～現在＞

2006.3.5・6	第11回研究会（京都大会 於：三高会館 荒井・神辺・田中・谷本・鄭・富岡） 個別研究報告、コロキウム総括
2006.4.15	第15号刊行（以後鄭編集）
2006.6.10・11	第12回研究会（京都大会 於：三高会館 荒井・巖・小宮山・田中・谷本・鄭・富岡） 個別研究報告
2006.7.15	第16号刊行
2006.9.29・30	第13回研究会（東京大会 於：高円寺 荒井・神辺・小宮山・佐喜本・田中・谷本・鄭・富岡・福井） 東大駒場博物館史料調査、個別研究報告

2006.10.15	第17号刊行
2006.10	科研費への応募（小宮山代表） 「近代日本における進学ルートの形成—高等中学校をめぐる地域と国家の相互作用—」
2007.3.3・4	第14回研究会（京都大会 於：三高会館 小宮山・佐喜本・田中・谷本・富岡） 個別研究報告
2007.6.15	第18号刊行
2007.9.3・4	第15回研究会（熊本大会 於：国際交流会館 荒井・巖・小宮山・佐喜本・田中・谷本） 個別報告、熊大五高記念館史料調査
2007.10.15	第19号刊行
2007.10	科研費への応募（荒井代表） 「1880年代におけるエリート養成機能形成過程の研究—高等中学校成立史を中心に—」
2008.1.15	第20号刊行、研究会事務局富岡へ
2008.3.14・15	第16回研究会（東京大会 於：高円寺 荒井・神辺・巖・小宮山・田中・谷本・富岡） 東大駒場博物館—高史料調査、個別報告
2008.3.31	第21号刊行
2008.6.6・7	第17回研究会（熊本大会 於：五福会館 荒井・小宮山・佐喜本・田中・谷本・鄭・富岡・三木） 熊大五高記念館史料調査、個別報告 ※ 三木入会
2008.6.30	第22号刊行
2008.8.1・2	第18回研究会（東京大会 於：高円寺 荒井・神辺・小宮山・田中・谷本・富岡） 東大駒場博物館—高史料調査、個別報告

[お知らせ]

- ◇「研究紀要」発行の件については荒井代表から改めて提案がなされることになりました。す。詳しい予定は改めて連絡致します。（富岡）
- ◇次回研究会は、来年2—3月頃に京都で開催される予定です。◇ニューズレター24号の締切日は、2008年12月31日（水曜日）です。よろしくお願いたします。（鄭）

「1880年代教育史研究会」ニューズレター 第23号 2008年9月30日発行	
<研究会連絡先> 富岡勝 「1880年代教育史研究会」事務局 〒577-8502 東大阪市小若江3-4-1 近畿大学教職教育部 富岡勝研究室気付 e-mail: tomiokamasa@kindai.ac.jp	
<HP> http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/1880/	
<原稿送付先> 鄭賢珠 〒606-8203 京都市左京区田中関田町2-26 田中関田団地1-205 E-mail: hyunjjung4@hotmail.com	